

最近の教室における胸部領域手術症例の解析

——特に胸腔鏡下手術を中心に——

山本 聡¹⁾ 三好 立¹⁾ 平塚 昌文¹⁾
白石 武史¹⁾ 岩崎 昭憲¹⁾ 川原 克信²⁾
白日 高歩¹⁾

¹⁾福岡大学医学部第二外科

²⁾大分大学医学部第二外科

要旨：教室における呼吸器外科の年間手術総数は350を越え、2002年は400例に迫る勢いであった。最も多いのは肺癌症例であった。手術の特徴としては、小型肺癌に対して積極的な縮小手術を試みており、胸腔鏡を併用して、創部を小さくして肺機能も温存しながら癌の根治性を損なわない理想的な手術方法の実践に努めた点である。このように手術後の Quality of Life が重要視される最近の流れを反映して、胸腔鏡や縦隔鏡あるいは各種内視鏡を駆使し手術侵襲の軽減をはかった症例が全体でも約半数になり、2002年には50%を超えた。なかには、気胸や多汗症手術のように全症例が胸腔鏡下に施行される手術も出現している。また、食道癌や肺気腫・ブラに対する手術のように、その操作の約70%以上が胸腔鏡下に手術を施行される疾患や、乳癌に対する内視鏡手術のように一部早期の症例に導入されつつある疾患もある。特に教室の特徴として食道癌に対する胸腔鏡下切除はほとんどの症例を適応としており良好な成績をおさめ、わが国でも注目される存在である。今後は術後在院日数も考慮し、手術侵襲を可能な限り小さくして術後合併症を予防する努力が続けられ、しかも悪性疾患に対してはその根治性を低下させないという基本的な目標を視野におき、skill を含めた質 (quality) の向上に努めなければならない。

索引用語：胸部手術, 胸腔鏡, 呼吸器手術